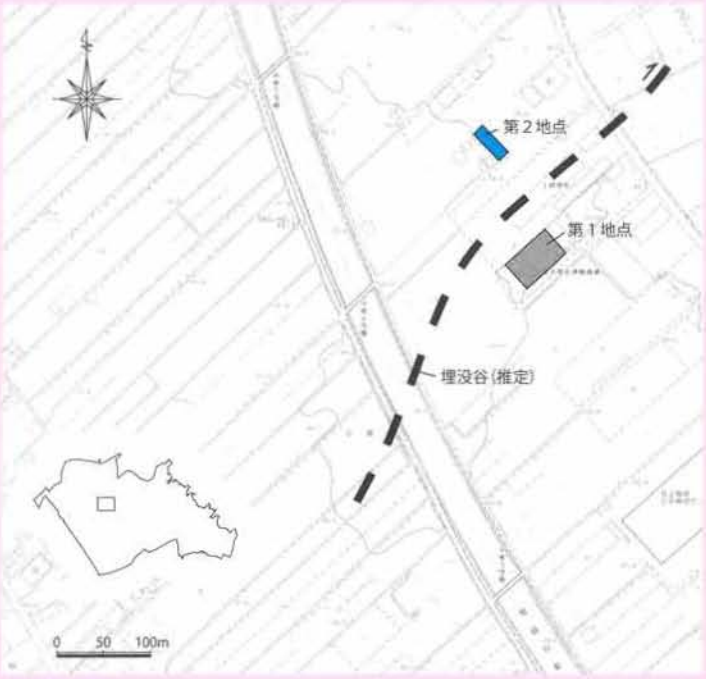
中東遺跡第２地点発掘調査の概要

The outline of Nakahigashi site 2nd spot excavation

石器集中１（北東から）

中東（なかひがし）遺跡は、武蔵野台地を開析する砂川中流域の右岸、砂川の谷に向かって開析する埋没谷の両岸に位置する。これまでに埋没谷右岸において発掘調査が行なわれ、旧石器時代のⅦ層より石器集中３箇所、礫群１箇所、Ⅵ層より石器集中４箇所が検出され、石器418点、礫26点が出土している（柳井章宏 1996『中東遺跡発掘調査報告書』三芳町教育委員会）。

埋没谷左岸にあたる中東遺跡第２地点の調査は、倉庫増築に先立つ記録保存のための発掘調査として、平成20年４月２日～４月20日にかけて109㎡を実施した。期間中は雨天の日が多く作業は難航したが、調査の結果、旧石器時代のⅨ層より石器集中２箇所が検出され、石器1,400点が出土した。



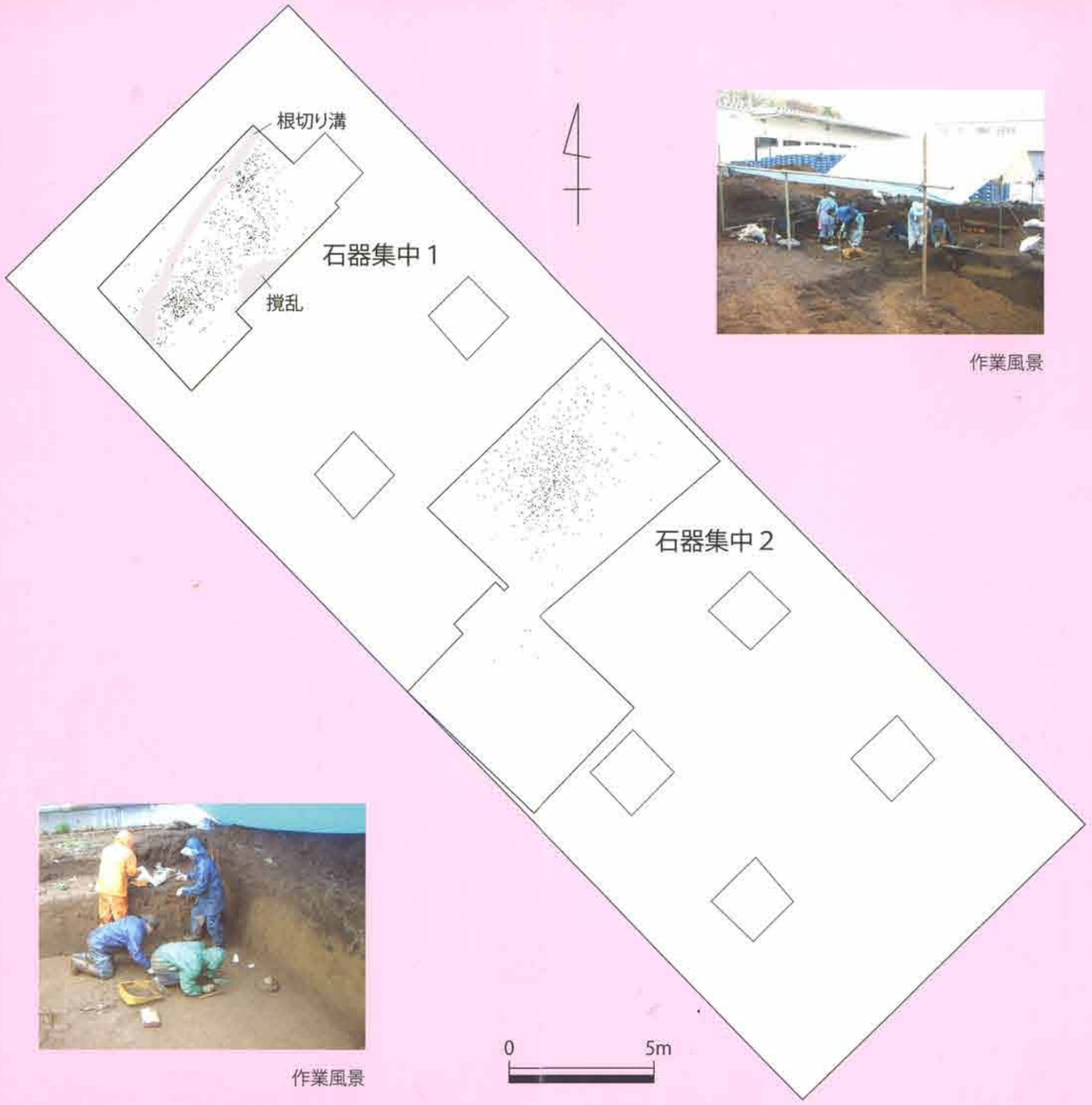
調査位置図

■ 石器集中 1

出土状況（南西から）

出土状況（北西から）

作業風景



作業風景

■ 石器集中 2

出土状況（南西から）

出土状況（北東から）

剥片・砕片

（左）ナイフ形石器

台石

敲石（たたきいし）・剥片・砕片

ナイフ形石器

剥片

遺物の分布は南北 7.3m ×東西 6m を測る。分布状況からさらに 3 つのまとまりに細分できると思われ、それぞれから台石と思われる礫が出土している。出土層位はⅤ層～Ⅸ層と幅があるが、これは深い所ではⅩb 層まで入り込んでいたロームのソフト化の影響を受けて遺物が動いた結果と考えられ、本来の層位はⅨ層である。

石器の総点数は 823 点であり、814 点が黒曜石製であった。主な石器は、ナイフ形石器、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、石核、敲石（たたきいし）などである。接合関係は複数個体認められ、石器集中 2 との接合も見られる。

なお、石器集中内にはⅩ層上面に達する根切り溝、Ⅸ層に達する撹乱が存在し、遺構が部分的に破壊されていた。

遺物の分布範囲は南北 6.7m ×東西 6.4m を測る。石器集中 1 に比べると密集度は薄い。出土層位はⅥ層～Ⅸ層下部と幅があるが、石器集中 1 と同様の理由から、本来の層位はⅨ層である。

石器の総点数は 577 点であり、556 点が黒曜石製であった。主な石器は、ナイフ形石器、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、石核、敲石（たたきいし）などである。製品は石器集中 1 よりも多く出土している。接合関係は複数個体認められ、石器集中 1 との接合も見られる。

台石と思われる礫は 2 点出土しており、この周囲に敲石・剥片・砕片が広がる状況は、石器集中 1 と同様である。

・石1＝石器集中1，石2＝石器集中2
・石核の△は剥離方向を示す
・写真の縮尺はすべて1/2

■ 出土遺物

中東遺跡第2地点から出土した1,400点の石器のうち、1,369点が黒曜石製である。母岩は黒曜石1～3の3母岩に分けられる。そのうち、あまり質の良くない黒曜石である黒曜石1は1,336点で構成され、石器集中1で807点、石器集中2で529点出土していることから、中東遺跡第2地点では、場所を変えながら黒曜石1を主体的に剥片剥離したものと考えられる。また、透明で質の良い黒曜石である黒曜石3は、砕片を伴わず6点のみであるため、外部からの持ち込みであろう（写真最上段左端のナイフ形石器含む）。

接合した石器は、2点接合から18点接合まで61個体認められる。石核からは、90°または180°打面転移しながら剥片剥離を行っていることがわかる。石器集中1・2で互いに接合した石器を観察すると、まず石器集中2で剥片剥離を行い、その後、残核を石器集中1へ持ち込んでさらに剥片を作り出している様子が見て取れる。

中東遺跡第2地点の発掘調査では、旧石器時代のⅨ層から石器集中2箇所が検出され、1,400点もの石器が出土した。10mほど離れた石器集中から出土した石器が互いに接合することから、2箇所の石器集中は同時期あるいはかなり近い時期に作られたものと考えられる。

今後は、接合した石器を詳細に観察して当該期の剥片剥離技術について考察するほか、今回の調査地点とは埋没谷をはさんで対岸にあたるが、前回調査地点との関係について、立地なども含めて比較検討していく必要があろう。

三芳町の文化財・考古2
中東遺跡第2地点発掘調査の概要

発行日　平成20年7月25日
編集機関　三芳町教育委員会
入間郡三芳町藤久保1100-1
Tel.049-258-0019
発　行　三芳町教育委員会
印　刷　深志印刷株式会社